

ブロッケンの妖怪に会えた

岩井 淑

7月30日 曇り

中房温泉登山口より燕岳への登山を開始したのは8時45分である。

登山口から掛け値なしの急登である。日本アルプス3大急登の1つとは聞いていたが、イヤハヤナントモである。

第1ベンチ、第2ベンチ、第3ベンチ、・・・と1ピッチ25分のペース配分で登り、合戦小屋の旨い西瓜にありつけたのは登り始めてから2時間15分後であった。

ガイドブックによると3時間の行程とあったが、二日酔いに加えて朝風呂によって完璧に緩みきった筋肉にはさすがにこたえた登りだった。

1時間半の昼食休憩後、燕山荘へ向けて再出発する。中房温泉を出発する時は空模様を心配していたわけだが、時間の経過とともに台風11号の余波は消えつつあり、微かな薄日さえ射し始める。

登山道の脇に咲く純白のナナカマド、コイワカガミやハクサンフウロのピンク、シナノキンバイの鮮やかな黄色、ゴゼンタチバナ、コケモモ、ハクサンイチゲ、コバイケイソウ、チシマギキョウ、チングルマ、等、数え上げたらきりが無い程に高山植物の可憐な花々の優しい微笑みが、汗まみれになりグロッキー気味の体に元気を取り戻してくれる。

合戦小屋から燕山荘まではハイマツの中を歩く明るい1時間程のコースであり、キバナシャクナゲやアオノツガザクラが話しかけてくる。

燕山荘脇の幕営地では20張り程のテントが張られ、中には残雪の上に設営されているのも見受けられる。ひとごとながら寒くないのかなあといらぬ心配までしてしまう。

燕山荘から眺める槍ヶ岳から残雪の立山連峰へとつながる峰々の稜線は実に見事なものである。天候が回復途上にあるため雲の動きが速く、湧いては消え、消えては湧くの連続で稜線もそのたびごとに見え隠れしている。

燕山荘で宿泊の手続きを済ませ、一休みした後、いよいよ高山植物の女王と呼ばれているコマクサに会いに燕岳への登山を再開する。

燕岳は白っぽい石英系砂岩が露出する特徴ある形をしており、登っていてもとても明るく感じのよい山である。

ピンクの花を下向きにして、うつむき加減に可憐に咲くコマクサは、それこそいたるところで見ることが出来る。可憐という言葉はまさにこの花のためにあるのではなからうか。ウーンとうなりながらしばしその姿を見入り続けると、とても柔らかそうな青緑色の葉と薄桃色の花がこちらの心も優しくしてくれる。

今年4月に雪が多量に降ったため雪解けが1カ月程遅れ、その影響を受けて開花時期も例年より遅れ、今の時期でコマクサは満開の時を迎えているのである。

30分程で2767mの山頂へたどりつく。山頂では約20人程の登山者がたむろし、わかるがわる記念撮影をしている。我々4人も記念撮影後、山頂直下で登頂記念の祝宴を挙げる。まずはビールで乾杯。その後、ウィスキーを飲みながら2時間程のんびりと稜線の景色を満喫する。

燕岳山頂直下での祝宴を終え山荘へと戻って来ると、500m程手前で北東の谷側を覗き込んでなにやら騒いでいる人達がいる。なんだろうか？ と思いながらよっていくと『ブロッケン妖怪』の登場であった。

『ブロッケン妖怪』については本などでは読んだことはあったが、自分で体験するのは初めてである。谷底から湧き上がってくる雲がスクリーンとなって太陽光線の回折作用によるプリズム現象が作り出す光輪の虹の中央に自分の影が浮かび上がるもので、実に幻想的である。単独行の登山者が自分の影を妖怪と間違えたという逸話もなるほどと諾けるものである。

初めてこの気象現象を確認したヨーロッパ・アルプスにある山の名前を採って『ブロッケン現象』と呼ばれているもので、めったに発生することのない現象であり、また、数10分という短い時間で消滅してしまうため、体験できることは極めてまれな現象なのだ。もう10年近くも山登りをしているが『妖怪』に出会ったのは初めてである。ラッキー！！

7月31日 晴れ

台風11号が過ぎ去ったと思ったら、今度は12号の接近である。今年は台風がじつに多い。心配していた空模様は、関東地方では大雨が降り続けているが、北アルプス地域は崩れることなく晴れである。

今日のコースは、燕山荘～大天井岳～東天井岳～横通岳～常念小屋までである。山荘を出発したのは6時。

アルプス銀座と名付けられている本コースは、北アルプス地域でも最も人気のあるポピュラーなコースのため登山者が多く、しかも誰にでも登れるコースのためかファミリー登山が目につく。コースの右側には北アルプスの盟主・槍ヶ岳がそびえ立ち、残雪の多い山容は空の蒼さ、樹木の緑、雪の白、岩の茶色が見事なコントラストをなし、あくことなき光景を展開している。これだから山はやめられないのだ。

雪渓を2度横切り、町営大天荘へ着き、リュックを置いてから大天井岳山頂へ向かう。小屋の上部はかなりの量の残雪である。10分も歩けば2922mの山頂に到着するが、10人程の人が360度のパノラマをそれぞれの心の印画紙に焼付けている。

昨年登ったカラ沢から奥穂高岳への道もハッキリ眺めることが出来る。カールでは残雪も多く、シュプールも鮮やかに夏スキーを楽しんでいる人達が見受けられる。赤、青、緑、黄と色とりどりのテントも雪の上に設営されている。

＃・・・小槍の上でアルペン踊りをいたしましょ・・・＃ などと鼻歌を歌いながら過ぎ去って行くファミリー・パーティの歌声に、いつしか小槍も大槍の向う側へ姿を隠してしまい、その大槍の頂上にはへばりつくように人影が見える。

昼食にはまだ早いので先へと歩を進めると、明るい稜線上の登山道脇からは、イワオウギやイワツメクサの白、ミヤマハンショウヅルの紫、タカネシオガマの赤紫、オヤマノエンドウの青紫、や相変わらずに薄桃色で微笑みかけるコマクサ。これらの高山植物の花々は温室の中で育てられ、大きくしかもあでやかに咲くはなやかさはないが、自然の厳しさの中で小さいながらも毅然と咲いている。これらの花々の挨拶を次々に受けていると、夏山JOYの人気の秘密はまさにここにあることを実感する。

東天井岳山頂は登山道から左にそれ、5分程登ったところである。スケジュールからいっても十分に時間的な余裕があるので、山頂まで登って昼食にする。この山頂も360度のパノラマを楽しむことが出来る。2時間程の休憩後、ガスがかかりだしてきたので横通岳から常念小屋へ向けて再出発する。

8月1日 雨

昨夜から降り出した雨は朝になっても止まず、しかたなしに常念岳から蝶ガ岳へという当初の登山コースを変更し、前常念岳へトラバースし、三俣へ下山する。

このトラバース道は登山者があまりいないのか、道はかなり荒れており、朝まだ早いため雪渓を横切る時はまだ凍っており、傘の石突きと登山靴で足場を確保しながらの横断である。滑り易いので慎重に行動するが、落ちたら一巻の終わりである。

昨日、一昨日と声だけ聴こえ、姿を見ることが出来なかった雷鳥が、あたかも我々を道案内するかの如くチョコチョコと前方を歩いている。飛び立った翼は白い冬羽根、体は茶褐色の夏羽根をしており、斑模様であった。

雨足はいっこうに衰えず、むしろ強まる気配である。常念岳からの登山道と合わさるところが前常念岳で2661m。いよいよガラ場となる。濡れた岩は滑り易く、思いもかけない怪我にあうかもしれないのでペースは遅れがちとなるが、いたしかたのないことである。

避難小屋で一休みした後、下山を再開する。このガレ場を下山中にも雷鳥がヒョッコリと姿を現す。しばらくの間、岩の上でこちらの動向を探っていたが、やがてハイマツの中へと丸っこい姿を消してしまった。

台風11号

に刺激された前線は関東地方に大雨を降らせ、川崎で発生した土砂崩れによって住民3人と2次災害により救助隊員である消防署員3人が亡くなられた。

1989, 8, 10, 記